

ヘッド・スタートにおける保育者と保護者との連携

Cooperation between Childcare Workers and Guardians in Head Start

管 田 貴 子*
Takako KANDA*

要 旨

本研究の目的は、米国において補償教育政策の一環として導入されたヘッド・スタートにおける保育者と保護者との連携方法を明らかにすることで、わが国での保育者と特に外国籍保護者との連携のあり方について示唆を得ることである。

ヘッド・スタートでは、「保護者の参加」が「子どもの知的向上」と関連づけて評価されるという特徴が見られた。日々の保育に保護者がボランティアとして参加しており、それによって保育者と保護者がパートナーシップを形成し、子どもにより良い保育・教育を与えようとしていた。また、保育者に求められるコミュニケーションスキルの向上のために、米国の厚生省が手引書を作成し、保育者と保護者との連携をサポートしていた。

キーワード：ヘッド・スタート、保育者、保護者、連携

1 はじめに

わが国では、多様な文化的背景をもつ幼児の幼稚園・保育所への入園にともない、「多文化教育」や「共生のための教育」について研究が進められている。しかし、現状としてこのような幼児の受け入れにともなって生じる課題は残されたままである。そのうちの1つが保育者と外国籍保護者との連携である。

筆者はこれまで、保育現場におけるニーズの多様化に伴い、特に外国籍幼児に焦点をあて、「外国籍幼児の園生活への適応過程」を保育者と保護者の認識の変化をくわえながら検討した（管田，2006a）。その結果、保育者と保護者が外国籍幼児に対して身につけるように期待することや、外国籍幼児の適応や発達に対する認識にはズレがあることが示された。

そこで本研究では、米国において「補償教育政策の一環として導入」された就学前施設であり（添田，2005）、幼児教育において、先駆的に保護者の関与を促進したヘッド・スタート（ジグラー・ムンチョウ，1994）を取り上げる。ヘッド・スタートとは、経済的貧困や差別の中にある子どもたちに、早期に幼児教育の機会を提供し、小学校入学時点では白人・中流階層の子どもたちと学力で引けをとらないレベルに引き上

げ、落第や中退を防止し、将来の失業や犯罪の増加の予防を期待したプログラムである（大宮，2006）。

ヘッド・スタートの子どもの3分の1は、家庭で英語以外の言語を話しており、最も多いのはスペイン語（86%）で、その他（ドイツ語、ラテン語、ユピック語、フランス語、フモン語、中国語、アラビア語など）26の言語が使用されている（U.S. Department of Health and Human Services, 2006）。すなわち、多様な文化的背景をもつ幼児が多く通園している。

わが国では、ヘッド・スタートに関する学会発表が多くなされ、ヘッド・スタートを主題とした文献が出版されて、研究が蓄積されてきた（陶山，1995；添田，2005；ジグラー・スティフコ，1998など）。しかしながら、これらの文献では、「ヘッド・スタートと家庭の変化」や、「親によるヘッド・スタートの支持」、「親の関与」について、いくらか取り上げているものの、ヘッド・スタートにおける保育者と保護者との連携のあり方については、十分に検討されていない。

よって本研究の目的は、ヘッド・スタートにおける保育者と保護者との連携方法を明らかにすることで、わが国での保育者と外国籍保護者との連携のあり方について示唆を得ることである。

* 弘前大学教育学部学校教育講座

Department of School Education, Faculty of Education, Hirosaki University

2 ヘッド・スタートの目的と保護者参加のはじまり

(1) ヘッド・スタートの目的

ヘッド・スタートは、「一定の所得水準以下の家庭とその子どもたちを対象に、彼らに欠ける栄養的、医療的、言語的、情緒的側面を補償し、それによって公立学校への適応、社会への適応をめざす国家的福祉事業」である（大戸，1976c，23頁）。「ヘッド・スタート」という用語は、すべての子どもが能力的に平等な立場で小学校へ入学できるようにという願いをあらわしたものである（大戸，1977c）。黒人を中心とする経済的貧困家庭の子どもは、小学校入学以前にすでに学力の差がついているとして、小学校以前の子どもたちにヘッド・スタートで様々な教育機会を与えている（田中，1996）。このような貧困家庭児童への就学前教育の拡大は、教育の機会均等に少しでも近づくための数少ない現実的政策と見られている（太田，1995）。

大戸は1976年から1977年にかけて、「米国の幼児教育における五つの実験」として15編記している。そのなかで、ヘッド・スタートを1965年に「貧乏との戦い」という大きなプロジェクトの一部としてスタートした「政府主導の実験」としている（大戸，1976a）。そしてその特徴を、「政府が貧困を生み出す基盤としての社会・経済システムはそのままに、貧困の中で生活している人々の方に焦点をあて、教育、訓練、労働によって彼らの下降現象をくい止めようとする戦略をたてて、『貧困との戦い』に臨んだ」としている（大戸，1976b，55頁）。すなわち、通常の就学前教育、学校教育、あるいは社会教育の対象からもれる人々を特別に訓練し、彼らを通常教育制度の中に留め、あるいはそこで適応できるように引きあげる「補助教育プログラム」であるという特徴がある（大戸，1976b）。

このようなヘッド・スタートは、2006年には67億8577万ドルの予算のもとに、21万3000人のスタッフと136万人のボランティアによって、1万9800の施設において、90万7000人の幼児（3歳児未満10%、3歳児34%、4歳児52%、5歳児4%）に保育サービスが提供された。アメリカでは0～5歳児の21%が連邦政府の定める貧困層に該当するが、貧困層の65%がヘッド・スタートに参加している計算になる（深堀，2008）。

また大戸（1996b）によれば、ヘッド・スタートが通常の幼児教育機関（ナースリー、幼稚園）とわずかに異なる点として次の5つがある。

- ① 教師、子どもの比率を低くし、小グループの指導を行う。
- ② 健康、医療および心理的、福祉的サービスを盛りこんだ幅の広いプログラムで行う。
- ③ 親と密接で継続した関係をもつことを重視する。
- ④ 直接経験を沢山ふくむようにする。
- ⑤ 言葉の発達について特別の援助を盛り込む。

このような特徴の中でも特に、③の「親との関係」に焦点をあてて見ていく。

(2) 保護者参加のはじまり

ヘッド・スタートは貧困撲滅のための2世代プログラムであり、貧困家庭の幼児の保育に対して特別の支援を提供することと共に、保護者の子育てや社会生活を支援することで、貧困家庭の子育て機能を高めていくことも目指された（深堀，2008）。よってヘッド・スタートで対象とする子どもは、第一次集団としての家庭で、第二次集団（学校・職場）に入る前に、第二次集団の価値・行動様式の準備学習経験を持たない子どもである（佐藤，1974）。

そのため、ヘッド・スタート発足当時、子ども15人に教師1、助手1、補助の母親1の割合が厳守され、大人と子どもの比率、1対5は徹底しておこなわれた。連邦政府がヘッド・スタートの主導権をとってきたが、具体的な活動の規模や内容の決定は各地域の住民代表、父母代表と専門家よりなる政策委員会にまかされてきた（大戸，1976c）。すなわち、ヘッド・スタートの保護者は、保育補助や活動決定にかかわる形で参加してきた。

1974年にはBronfenbrenner（Bronfenbrenner）によって、ヘッド・スタートに関する継続研究結果が出され、以下のような内容が記された（大戸，1977b）。

- (1) 例外なく、ヘッド・スタート児は1年にプログラムを通して、IQおよび認知的な能力を伸ばしている。
- (2) ヘッド・スタート児は、非ヘッド・スタート児より社会的適応がよく、学業成績も良いと評価されている。
- (3) 認知的に構造化されたカリキュラムの方が、遊び中心のナースリープログラムよりテスト得点が良い。

- (4) 参加する年齢と期間は、認知得点の上昇に大きな影響を与えない。
- (5) プログラム終了後、1、2年間は下降し、3、4年の間に下位10%のレベルまで下降する傾向がある。
- (6) 最も急激な下降現象は、通常の小学校に移行した直後に起こる。
- (7) 収穫が最も小さく、最も早く失う子どもは、最も貧しい社会的、経済的背景を持つものである。
- (8) プログラムから収穫する能力に決定的な影響を与える要因は、家庭の中またはその周辺にある。例えば、子どもの認知能力の最も大きなロス、学校の休み中に起こる。(下線は筆者による)

この結果から、ブロンフェンブレナーは、今後のヘッド・スタートの重心を「家族中心」におくべきことを提唱し、その後のヘッド・スタートのあり方に影響を与えた(大戸, 1977b)。ブロンフェンブレナーの「システムモデル (Ecology of Human Development)」の考え方はヘッド・スタートで採用され、家族との連携を考える上でも知られるようになった(Gonzalez-Mena, 2008)。

ブロンフェンブレナーの「システムモデル」とは、子どもを中心とした「中核部の微視的システム (microsystems) から始まり、外に向かって中間システム (mesosystems)、外側システム (exosystems) を経て、巨視的システム (macrosystem) に至るもの」である(コール, 2004, p.184; Rogoff, 2003, p.45-48)。このシステムでは、どの子どもも中心に据えられ、子どもとは直接かわり合えない保護者の生活における出来事も、子どもの生活に影響を及ぼすことを示している(Gonzalez-Mena, 2008)。特にヘッド・スタートは、貧困家庭の子どもを対象とするため、保育者は子どもと共に生活し、子どもを保護する立場の保護者にも目を向けなければならない。

すなわち、ヘッド・スタートは、「平均的児童観」と「可変的知能観」の2つの仮定を根拠にしていると言える。「平均的児童観」とは、すべての子どもは基本的には精神発達と能力において極めて類似しており、家庭での養育、経験、動機、興味など主として家庭の教育的影響による差異によるという考えである。また「可変的知能観」とは、学力を決定する要因である知的水準は遺伝的に固定されるものではなく、初期

の急速な発達期における環境によって影響されるという考えである(佐藤, 1976)。

いずれも、家庭を含めた子どもを取り巻く環境の影響に着目しており、その環境を作る保育者と保護者の役割やパートナーシップが重要視されていると言える。

3 保育者と保護者とのパートナーシップ

(1) パートナーシップの形成

ヘッド・スタートでの保護者参加は、子どもだけでなく、プログラムおよび保護者自身にも有益であると考えられている。保護者が参加することで、保護者と子どもとの関係が改善され、保護者の生活への満足感が高まり、心理的に安定するといった効果がもたらされる(ジグラー・スティフコ, 1998)。そのため、保育者と保護者とがパートナーシップを築き、保護者参加を促すことが求められる。

パートナーシップとは、トップダウンではない双方向的なかかわり合いであり、次の4点が必要となる。それらは①温かく、魅力的な関係、②自己を尊重するとともに、他者を尊重すること、③パートナーシップを築く大切さを明確に伝え、そのようにかかわること、④上手に対応する技術をもち、敏感で自己内省的であることである(Gonzalez-Mena, 2007)。

このようなパートナーシップを築くためにも、ヘッド・スタートでは以下の3つの考え方を基盤とした保育者と保護者のコミュニケーションを重視している(U.S. Department of Health and Human Services, 2004)。

- 【1】効果的なコミュニケーションが、保護者と保育者とのパートナーシップの土台となる。
- 【2】改まった場面・日常の場面のいずれにおいても、効果的なコミュニケーションとは、敬意を表し、分かりやすいものである。
- 【3】上手なコミュニケーションの技術は、個人レベル、またプログラムのレベルで、意図的に練習しなければならない。

このように、保育者にはコミュニケーションを土台とした保育者と保護者とのパートナーシップの形成が求められる。次に、保育者に必要とされるコミュニケーションスキルについて見ていく。

(2) 保育者に求められるコミュニケーションスキル

保育者と保護者とのコミュニケーションで大きな障

害となるものは、保育者と保護者間の競争意識である (Gonzalez-Mena, 2007)。勝ち負けを越えた関係を作るためにも、保育者のコミュニケーションスキルが役立つと考えられる。保育者が保護者とコミュニケーションをとるために、面談やカンファレンスといった機会を設定することは意義があるが、単に機会を作ることよりも、保育者のコミュニケーションスキルを高めることが、保護者との連携の鍵となる (管田, 2006c)。

ヘッド・スタートの保育者に向けて、コミュニケーションスキルを訓練するために、「聞く、観察する、反省する、話す、書く」に焦点をあてた活動を紹介する手引書がアメリカの厚生省から出されている (U.S. Department of Health and Human Services, 2004)。この手引書には、1～3人の参加者にむけた指導用 (coaching) と、25人を上限とするワークショップ用の活動が紹介されている。

さらに、具体的な保育者の留意点としては、保護者に渡す書類に、保護者が読む時間や読む能力をあまり必要としない簡単な言葉を使うことが書かれている。例えば、“accomplish” (成し遂げる) の代わりに “do” (する) を使うべきであり、このような保護者向けの「簡単な単語や表現リスト」が載せられている (p.71)。この手引書はヘッド・スタートの保育者に提供され、保育者のコミュニケーションの向上に国として取り組んでいる点は、わが国の保育者と外国籍保護者との連携においても参考となるだろう。

(3) 保護者の参加方法

保護者の参加のあり方は、ヘッド・スタート計画の将来を決定づけるほどに大切であり、重要な問題であると見なされている (ジグラー・スティフコ, 1998)。そして、保育者と保護者とが連携するために、保護者の参加、特に「ボランティア」をヘッド・スタートではうまく活用している。保護者はボランティアの内容として、保育室で保育の補助をすること (35%) が最も多く、続いて保護者会への参加 (24%)、遠足への参加 (14%)、家庭で保育室の道具の準備や洗濯をするといった家庭における補助 (12%) を行っている (Castro, Bryant, Peisner-Feinberg, & Skinner, 2004)。

このような保護者のボランティアには、意義と課題がある。意義としては、参加した保護者が保育室で行われている内容や、子どもの学びの過程を知ることができること、わが子が他の子どもとかかわる場面を見ることで、より子どもへの見方が広がることである。また保護者は参加することで、ヘッド・スタート

の活動へ貢献したという良い気分を味わうことができる。参加すればするほど、保護者自身がもつ才能や技術、興味を活用することができる。さらに、他の保護者が自身の文化に関する活動や工芸品を紹介する様子を見て、自分ができるボランティアの内容についてのアイデアが広がる。しかしながら、課題もある。保護者が参加することで、保育者は子どもだけでなく、ボランティアの保護者用の計画も立てなければならないことや、子どもたちが保護者の前では、いつもと違ったふるまいをし、集団が混乱するといったことである (Gonzalez-Mena, 2007)。

保護者の中にはボランティアとして参加しない保護者もあり、課題となっている。保護者の仕事・勉強と、ヘッド・スタートの活動の日程が合わないことや、家庭に乳児がいることは参加の障害となる。他にも障害となりうる要因には、保護者の興味の低さ、保育者との居心地の悪い関係、保育者の認識の低さ、保護者と保育者 (または他の保護者) との言語の違い、文字を読むことの問題、家庭でのアルコール (麻薬) の乱用、ホームレス、移動手段のなさなどが挙げられる (Lamb-Parker, Piotrkowski, Baker, Kessler-Sklar, Clark, & Peay, 2001)。

保育者はこれらの要因に配慮し、保護者に合わせて日程を調整することや、家庭訪問を行うことなども求められる。また、保育経験が豊かな保育者のクラスでは、保育経験の少ない保育者よりも、保護者がボランティアとして参加する時間や回数が多いことが示されている (Castro, Bryant, Peisner-Feinberg, & Skinner, 2004)。よって今後は、保育経験の豊かなヘッド・スタートの保育者が、保護者の参加を促す方法について探ることも、ボランティアとして参加しにくい保護者とのパートナーシップを築くための糸口をつかむことにつながると考えられる。

(4) 保護者参加による子どもへの成果

ヘッド・スタートでは、保護者の参加が子どもたちの知的、社会的成果に関係すると見なされている。保護者がヘッド・スタートに参加し、満足しているとき、参加せず、満足していない保護者と比べて、たとえ家庭に複数の危険要因があった場合でも、子どもたちの成果は向上した (図1・図2参照, U.S. Department of Health and Human Services, 2006, p.11)。図2に見られるように、ヘッド・スタートは家庭の危険要因が、子どもたちに悪い結果をもたらさないよう、子どもたちを守る役割を果たすことも期待されて

いる。

また、アメリカにおいて保育の「効果」は、子どもの学業成績や「知的指数」向上で測られるが（大宮、2006）、特にヘッド・スタートでは、「保護者の参加」が「子どもの知的向上」と関連づけて評価されるという特徴が見える。このような理由からも、ヘッド・スタートでは保育者と保護者のパートナーシップが求められ、保護者は参加するように促されていると言える。

4 まとめ

保護者は子どもの成育歴や家庭での情報、子どもの未来のビジョンをもち、保育者は保護者と離れた教育現場での子どもの振舞いや能力を知っている。すなわち、このような子どもに関する情報や知識、経験を持ち寄ることで、個々の子どもに最善の保育や教育を与えることができる。そして子どもも保護者や教師が協同している姿を見ることで、安心感をもつのである（Gonzalez-Mena, 2007）。また、幼児にとってはある場所（例えば家庭）で学んだ振舞い方を、別の場所（例えば保育施設）において、変えて振舞わなければならないと理解することは難しいため、保育者と保護者との連携は特に重要であると言える。

ヘッド・スタートは、知的技能の基礎を教育する以

外に、子ども自身の健康・福祉にもはたらきかけたトータルケアを行っており（ジグラー・スティフコ、1998）、そのためにも、保護者教育や保護者の参加に重きを置いている。すなわち、ブロンフェンブレナーの「システムモデル」が、ヘッド・スタートにおける家族との連携の考え方の基になっていた。

わが国への示唆としては、ヘッド・スタートでは、日々の保育に保護者がボランティアとして参加しており、それによって保育者と保護者がパートナーシップを形成し、子どもにより良い保育・教育を与えようとしている点である。日本でも幼稚園・保育所では子育て支援が実施されている。しかし、特別な行事や保護者会への参加のみならず、日々の保育にも保護者にボランティアとして参加してもらうことで、保護者をエンパワメントしようとする取り組みは少ないのではないだろうか。さらに、保育者に求められるコミュニケーションスキルの向上のために、手引書を作り、保育者と保護者との連携を国がサポートしている点も参考となるだろう。

今後の課題としては、ヘッド・スタートにおける保育者と、父親を含めた保護者とのパートナーシップのあり方についてより具体的に探り、さらに評価に保護者の視点をいれる取り組みについても明らかにしたい。

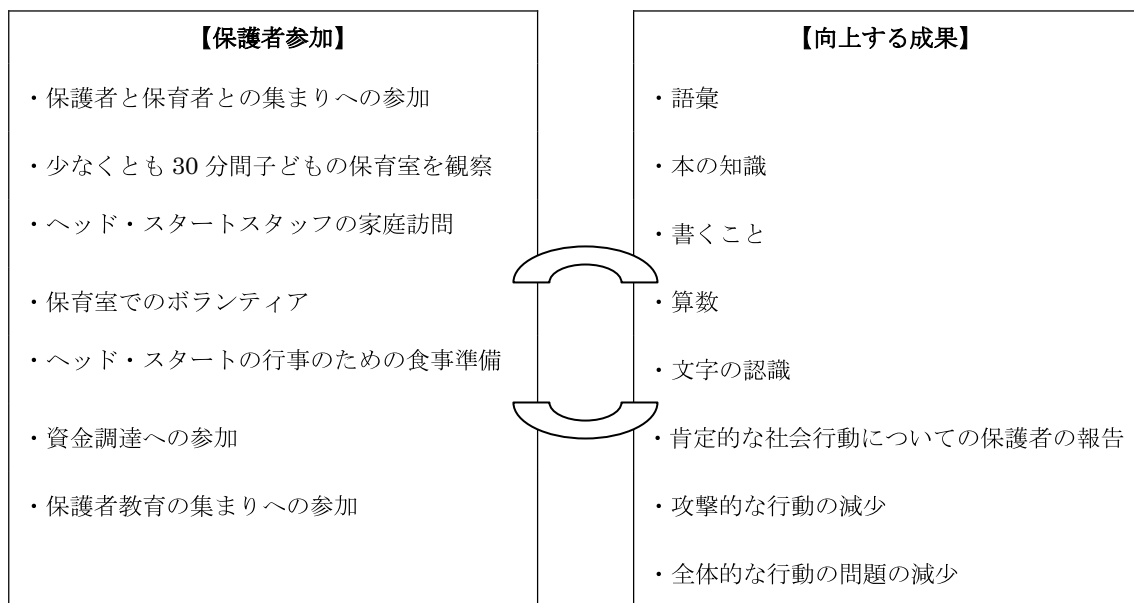


図1 保護者参加と子どもたちの成果との関連（筆者訳）

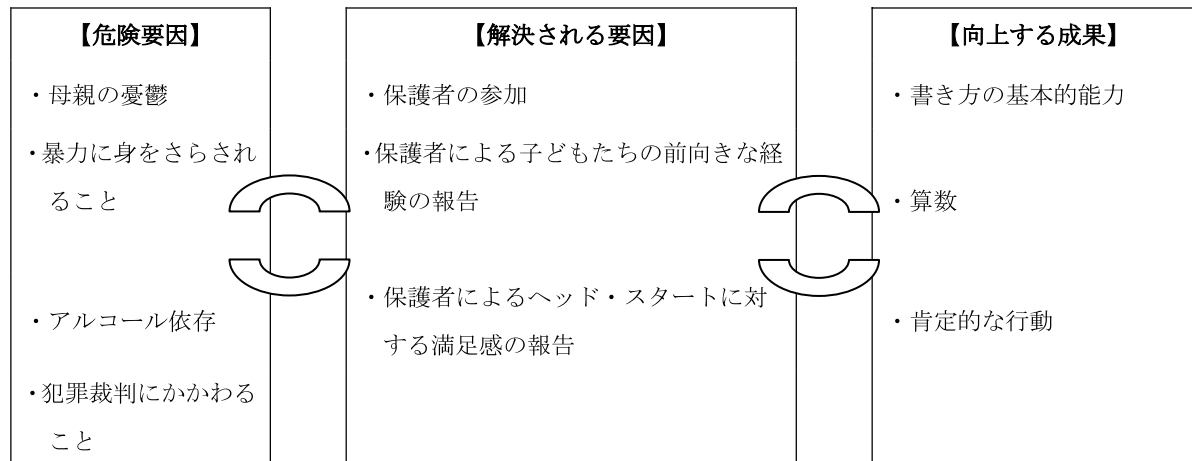


図2 ヘッド・スタートの子どもたちを保護する機能（筆者訳）

（参考文献）

- Bronfenbrenner, U. (1979) *The Ecology of Human Development*. Harvard university press.
- ブロンフェンブレナー, U. (1996) 『人間発達の生態学』 磯貝芳郎・福富護（訳） 川島書店
- Castro, D. C., Bryant, D. M., Peisner-Feinberg, E. S., & Skinner, M. L. (2004) Parent Involvement in Head Start Programs: The Role of Parent, Teacher and Classroom Characteristics, *Early Childhood Research Quarterly*, 19, 423-430.
- コール, M. (2004) 『文化心理学—発達・認知・活動への文化・歴史アプローチ』 天野清（訳） 新曜社
- Gonzalez-Mena, J. (2007) *50 Early Childhood Strategies for Working and Communicating with Diverse Families*. Pearson Education, Inc.
- Gonzalez-Mena, J. (2008) *Child, Family, and Community: Family-Centered Early Care and Education*. 5th ed. Pearson Education, Inc.
- 深堀聡子 (2008) 第2章 アメリカー学力の底上げをめざすユニバーサルな政策へー 泉千勢・一見真理子・汐見稔幸（編著）『世界の幼児教育・保育改革と学力』 明石書店 130-153.
- 管田貴子 (2006a) 外国籍幼児の保育所への適応過程に関する研究—留学生の子ども事例から見えてくるもの—『保育学研究』 44(2), 104-113.
- 管田貴子 (2006b) 幼稚園教諭のもつ外国籍幼児への期待に関する研究—中国人女児の事例から見えてきた課題—『乳幼児教育学研究』 15, 25-33.
- 管田貴子 (2006c) 米国の保育にみる文化的多様性の意義—マイノリティの子どもたちを中心に—『広島大学大学院教育学研究科紀要第三部』 55, 383-389.
- Lamb-Parker, F., Piotrkowski, C. S., Baker, A. J. L., Kessler-

- Sklar, S., Clark, B., & Peay, L. (2001) Understanding Barriers to Parent Involvement in Head Start: A Research-Community Partnership. *Early Childhood Research Quarterly*, 16, 35-51.
- NAEYC・ブレデキャンブ, S・コップル, C. (2002) 『乳幼児の発達にふさわしい教育実践』 DAP 研究会訳 東洋館出版社
- 大宮勇雄 (2006) 『保育の質を高める—21世紀の保育観・保育条件・専門性—』 ひとなる書房
- 太田晴雄 (1995) 9章 多様ななかの平等を模索する学校—アメリカ 二宮皓（編著）『世界の学校—比較教育文化論の視点にたって—』 福村出版, 136-149.
- 大戸美也子 (1976a) 米国の幼児教育における五つの実験 (1) —実験の始まるまで—『幼児の教育』 75(9), 18-25.
- 大戸美也子 (1976b) 米国の幼児教育における五つの実験 (2) —福祉と教育とを統合する実験=プロジェクト・ヘッド・スタート—『幼児の教育』 75(10), 54-61.
- 大戸美也子 (1976c) 米国の幼児教育における五つの実験 (3) 『幼児の教育』 75(11), 23-29.
- 大戸美也子 (1976d) 米国の幼児教育における五つの実験 (4) 『幼児の教育』 75(12), 18-24.
- 大戸美也子 (1977a) 米国の幼児教育における五つの実験 (5) 『幼児の教育』 76(1), 23-29.
- 大戸美也子 (1977b) 米国の幼児教育における五つの実験 (6) 『幼児の教育』 76(2), 19-27.
- 大戸美也子 (1977c) 米国の幼児教育における五つの実験 (7) 『幼児の教育』 76(3), 13-21.
- 大戸美也子 (1977d) 米国の幼児教育における五つの実験 (8) 『幼児の教育』 76(4), 28-33.
- 大戸美也子 (1977e) 米国の幼児教育における五つの実

- 験 (9)『幼児の教育』76(6), 16-21.
- 大戸美也子 (1977f) 米国の幼児教育における五つの実験 (10)『幼児の教育』76(7), 18-25.
- 大戸美也子 (1977g) 米国の幼児教育における五つの実験 (11)『幼児の教育』76(8), 32-38.
- 大戸美也子 (1977h) 米国の幼児教育における五つの実験 (12)『幼児の教育』76(9), 32-39.
- 大戸美也子 (1977i) 米国の幼児教育における五つの実験 (13)『幼児の教育』76(10), 28-33.
- 大戸美也子 (1977j) 米国の幼児教育における五つの実験 (14)『幼児の教育』76(11), 26-32.
- 大戸美也子 (1977k) 米国の幼児教育における五つの実験 (15)『幼児の教育』76(12), 28-34.
- Rogoff, B. (2003) *The Cultural Nature of Human Development*. Oxford university press, 44-48.
- 佐藤全 (1974) 米国における就学前補償教育計画(1)成立の背景と展開過程『香川大学教育学部研究報告第Ⅰ部』37, 91-121.
- 添田久美子 (2005)『「ヘッド・スタート計画」研究—教育と福祉—』学文社
- 陶山岩見 (1995)『ヘッドスタート研究』近代文藝社, 119-129.
- 田中圭治郎 (1996)『多文化教育の世界的潮流』ナカニシヤ出版
- 塘利枝子 (1999)『子どもの異文化受容—異文化共生を育むための態度育成』ナカニシヤ出版, 49-51.
- U.S. Department of Health and Human Services (2004) *Communicating with Parents: Training Guides for the Head Start Learning Community*. Diane Publishing Co.
- U.S. Department of Health and Human Service (2006) *FACES Findings: New Research on Head Start Outcomes and Program Quality*. (http://www.acf.hhs.gov/programs/opre/hs/faces/reports/faces_findings_06/faces_findings_bw.pdf)
- 山田千明 (編著) (2006)『多文化に生きる子どもたち』明石書店
- Zepeda, M., Rothstein-Fisch, C., Gonzalez-Mena, J., & Trumbull, E. (2006) *Bridging Cultures in Early Care and Education: A Training Module*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- ジグラー, E.・ムンチョウ, S. (1994)『アメリカ教育革命—ヘッドスタート・プロジェクトの偉大なる挑戦—』田中道治 (訳) 学苑社
- ジグラー, E.・スティフコ, S. (1998)『アメリカ幼児教育の未来—ヘッド・スタート以後—』田中道治 (訳) コレール社
- (付記) 本発表は、科学研究費補助金若手研究 (B)「就学前施設における外国籍幼児と外国籍保護者に対する保育実践の開発研究」(研究代表者: 菅田貴子、課題番号20730490) の研究成果の一部である。

(2010. 2. 1 受理)